ゆうことみゆきの
なるほど
アイヌ文化エッセイ

ソンコ de ソンコ

Vol.108

今月のテーマ

アイヌ文化のことをもっともっと話したい!
本田優子と村木美幸の二人が、その魅力を交代で執筆するソンコ(=お便り)形式のエッセイです。

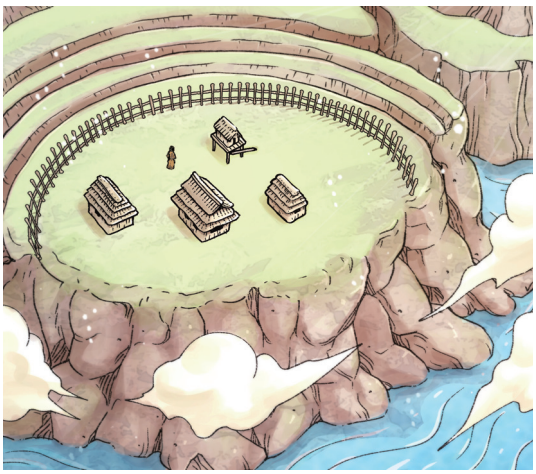
チャシ

村木美幸(アイヌ民族文化財団常勤理事)

「チャシ」って聞いたことありますか?アイヌ語では、柵や囲い、垣根、城、砦など様々に訳されます。チャシコツ(チャシ跡)と呼ばれる遺構でもあり、自然地形と、人工の堀や土塁でつくられます。

チャシはその立地によって分類され、岬や丘陵の先端を弧状の壕を切ったタイプを丘先式、崖に面した台地上に半円形や四角形に壕をめぐらすタイプを面崖式、他にも丘頂式や孤島式、平地式などがあり、掘られる壕は一~三条のものが多いといいます。チャシは戦争の砦や祭礼の場、見張り場、チャランケ(談判する/話し合う)の場などといわれますが、用途のわからないものも多いのだとか。でも、言い伝えの半数が闘争伝承というから、立地を考えるとうなずけます。

一六四三年のオランダの地理学者フリースの探検記録に厚岸のチャシが記されています。丘の上に砦があり、その後方には八~十軒の家があった。少し離れた対岸にも二つの村があって、それぞれ山上に砦があり、方形の防御柵は人の丈の一・五倍もの高さがあり、中に二、三軒の家、柵には見張りのための足場があったとのこと。砦は村との位置関係や構造を考えると有事の際の避難場であり、敵の攻撃を防ぐ要塞ということでしょうか?口承文芸で語られるチャシは、カムイ(神)やユカラ(英雄叙事詩)の主人公の住まい。家は大きく、高い崖の上にあり、崖は雲の上に突き出て、その上に金の家が建ち、金の柵をめぐらせ、家には二つの渦まき、三つの渦まきが彫り刻まれ、その間に連なる大粒の鈴が飾り付けられ、長い柵は雲の上に頭を出し、その先は外側へ反り、短い柵は長い柵の間に隠れ、などと語られます。煌びやかで荘厳なイメージで、想像するだけで楽しくなりますよね。



イラスト/荘田悠人

発掘調査や古文献などの記録からチャシは、十六~十八世紀に多くつくられ、そのほとんどが自然の地形を利用しているので、専門家に言わせると「(地形を)見ればわかる。」と、確認しやすい遺跡のようで、道内では五〇〇基を優に超えるとのこと、すごい数ですよね。その三分の二が釧路、根室、十勝、日高地方に集中しているというのも驚きで、その時代のアイヌの文化的要素はもちろんのこと、社会の情勢や構造を知る上でもチャシが重要な遺跡であることは間違いないですよね。 J

次回のテーマは「トマ(エゾエンゴサク)」
本田優子(札幌大学教授)が担当します。

ウポポイ
NATIONAL AINU MUSEUM and PARK
民族共生象徴空間
北海道白老町にOPEN

ウポポイPRキャラクター
「トゥレッポん」

イランカラプテ
「こんにちは」からはじめよう。

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学教授。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団常勤理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■荘田悠人(しょうだゆうと):平取町二風谷生まれ。漫画家兼イラストレーター。幼い頃のアイヌ文化が原風景。東京在住。